

に耳を向けながら、よく軒先から足を放り出し、目の前に広がる森を眺める。「日本が恋しくなったのかい？」としばしば聞かれるが、そうではない。鳴きしきるさまざまな虫の声と刻々と色を変えていく森の姿は、実に

神秘的で美しい。私は薄闇の中に悠然と広がる森を眺めながら、シハンの人々の腹を満たす森、人々が空想するユニークな動物が住む森、さまざまな森の姿に思いを馳せているのである。

「ゴリラはナイフを持っている」

—カメルーンの森から—

服部 志帆*

中央アフリカのコンゴ盆地一帯に広がる熱帯雨林（写真 1）には、「ピグミー」と呼ばれる狩猟採集民が暮らしています。「ピ



写真1 アフリカ熱帯雨林（写真提供：木村大治）
コンゴ盆地一帯に広がる熱帯雨林は、総面積が1億7千万haに及びます。この森は、多様な動植物とともに「ピグミー」の生活の舞台となってきました。こんもりとした緑のかたまりの下には、「ピグミー」のキャンプがちらばっており、このキャンプを基点に彼らは狩猟や採集、漁労へと出かけます。

グミー」はゴンゴ (*ngongo: Megaphrynium macrostachyum* (Benth.) Milne-Redhead. クズウコン科) やボボコ (*boboko: Ataenidia conferta* (Benth.) Milne-Redhead. クズウコン科) と呼ばれる大きなウチワのような葉でできたドーム型の住居（写真 2）に暮らし、狩猟や採集、漁労を行なうという生活を送っています。高台から「ピグミー」の森を眺めると、青い空を背景に深緑色の世界がどこまでも広がっています。また、森の中に一歩足を踏み入れると、樹高が 40 m ほどにもなる巨木が薄暗い空間を作り出し、太陽の光はわずかに地上に届くくらいです。この森では、ゾウやゴリラなどの哺乳類や樹間を飛び交う色とりどりの鳥たち、大河にゆうゆうと身をゆだねる爬虫類、目もくらむほどの数で訪問者を圧倒する昆虫がその生を営んでいます。「ピグミー」はこのような動物たちを狩

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 「ピグミー」の住居

家作りはおもに女性によって行なわれます。数日間かけて少しずつ完成されることが多く、費やされる時間は合計しても4~5時間程度です。立ち上がって動き回ることのできないような小さな住居は多くの機能をもたず、食事と眠る際に利用されるぐらいです。



写真3 狩猟帰りの男たち

バカ・ピグミーは動物が捕れない日が続くと、「フェネ(*pene*)」という言葉を使って肉に対する欲求を表し始めます。フェネが村やキャンプに満ち始めると、これに押されるように男たちは狩猟へ出かけます。ただし、なかなか出かけないこともあります。

猟し日々の食料にするほか(写真3)、太鼓や踊りの衣装、そして薬の材料として利用します。また、動物たちは「ピグミー」の民話に頻繁に登場し、森のキャンプを舞台に個性豊かな動物たちが活躍する歌物語が語られます。では、カメルーン東南部に暮らすバカ・ピグミーの森のキャンプで、焚き火を囲みながら狩猟の達人に聞いたゴリラの物語を紹介しましょう。

“ある時、バカ・ピグミーの男たちが森に狩猟へ出かけた。河を渡り、ラフィア椰子(*peke: Raphia monbuttorum* Drude. ヤシ科の樹木。樹液がヤシ酒になるほか、葉は屋根葺きや歌と踊りの衣装に、葉柄は乾燥台や矢を作るのに利用される)の茂る湿地を越え、森のキャンプに到着した。夜が近づいていたので、あわてて家を作り、焚

き木を集めた。火をおこし、焚き火の中にプランテンバナナを入れて焼いた。あたりはずいぶん暗くなった。男たちはプランテンバナナが焼けるのを待ちながら、それぞれがこれまでに狩った動物の話に興じていた。すると、すぐ近くの茂みのほうから、「ホーッ、ホッ、ホッ、ホー」というおたけびが聞こえてきた。ゴリラの鳴き声だ。キャンプは一瞬にして緊張感が満ち、槍を持った男たちはわれ先にと暗闇めがけて飛び出していった。どのくらい経っただろうか。男たちが帰ってきた。ゴリラはどうやら逃げてしまったようだ。しかし、男たちの興奮はなかなか冷めず、キャンプでは遅くまで男たちの話し声が絶えなかった。

翌日、男たちはさらに森の奥にあるキャンプを目指して森の中を歩いていた。大きなボココ(*bokoko: Klainedoxa gabonensis*

Pierre ex Engl. イルビンギア科の樹木。種子が食用になり、火であぶって食すと香ばしい味がする)の木の傍で、一匹の大きなメスゴリラに出くわした。ゴリラは男たちに気づくと、男たちのほうに激しい勢いで向かってきた。一番前にいた男が、槍をゴリラめがけて投げた。槍はゴリラにみごとに命中し、ゴリラはどさっと倒れた。男が近づいてみると、倒れたゴリラはなんと手にナイフを持っていた。さらに驚いたことに、木陰に隠れていたのだろうか、子どものゴリラが現れ、親ゴリラの手からナイフをとって逃げた。男たちは慌てて子どものゴリラに槍を投げたが、命中せず、子どもは森の中に消えた。”

筆者が初めてこのゴリラにまつわる不思議なお話を聞いたのは、今から7年以上も前のことです。カメルーンの森でバカ・ピグミーとともに生活を始めたばかりの頃で、つたない言葉で「ゴリラはどうしてナイフを持っているの?」、「ゴリラはナイフでいったい何をするの?」と聞いてばかりいたことを思い出します。彼らの説明が聞き取れず、ずいぶんもどかしい思いをしました。それから、バカ・ピグミーとともに過ごす時間が増え、彼らの言葉も少しはわかるようになり、ゴリラがバカ・ピグミーにとって重要な動物であることがわかってきました。

ゴリラはバカ・ピグミーの言葉で「エボボ(*ebobo*)」と呼ばれており、特別にオスには「ギレ(*ngile*)」、メスには「マンゴンベ(*mangombe*)」という名前が付けられています。

す(写真4)。ゴリラのオスの体長は160cmほどあり、体重は150kgを超えます(メスはオスよりひとまわり小さい)。バカ・ピグミーの成人の平均身長が150cmほど、平均体重が45kgほどであることを考えると、彼らにとってゴリラがいかに大きな動物であるかがわかります。ゴリラの狩猟は命をかけた真剣勝負であり、ゴリラを槍で倒すということはハンターにとって大変名誉なことです。ハンターは倒したゴリラの性別や年齢、体つきなどの特徴をよく覚えており、狩猟の様子を細やかに話します。あるハンターはゴリラの皮で作ったポーチを大切に懐から取り出し、仕留めたゴリラについて語ってくれました。また、あるハンターはゴリラに膝下を噛み付かれ、あまりの痛さに数週間泣きわめいたといいます。このように男性にとっては命がけの狩猟動物であるゴリラは、女性にとっては森で出会いたくない動物です。とく



写真4 ゴリラ(写真提供:竹ノ下祐二)
アフリカには西ローランドゴリラ、マウンテンゴリラ、東ローランドゴリラが生息します。カメルーンに生息するのは西ローランドゴリラです。写真のゴリラは、ガボンにあるムカラバドゥドゥ国立公園の西ローランドゴリラです。

に子どもを連れてくるゴリラは凶暴だといわれます。女性が森へ採集に出かけたとき、ゴリラを見つけてしまったら、気づかれないようにこっそりと逃げます。慌てて村へ帰ってきた女性の狼狽ぶりはたいそうなものでした。このような怖い思いをしないように女性は「ゴリラのお守り」を作り、不安を鎮めて森へ出かけます。ある女性は、フルアサファ (*fulu a safa: Adenia tricosata* De wilde. トケイソウ科) のツルで編んだお守りを身につけて森へ行くといいます。さらに、「ゴリラの葉」と呼ばれる植物、マナエボボ (*mana ebobo: Lankesteria elegans* (P. Beauv.) T. Anderson. キツネノマゴ科) の葉 (写真 5) を腰や首につけて森を歩くともいいます。このようにすれば、森でゴリラに出会わないとか、また男性や女性に劣らず、子どもたちにとってもゴリラは存在感のある動物のようです。子どもたちは筆者のところへお気に入



写真 5 「ゴリラの葉」になる植物

「ゴリラの葉」になる植物は腰の丈ほどにもならない低木で、オレンジ色の果実をつけます。バカの女性は、森を歩いているときオレンジ色の果実が眼に入ったら、葉を一枚さっとちぎりとり身につけます。

りの動物図鑑を借りに来ては、ゴリラのページを広げおもしろおもしろにゴリラ談義を繰り広げるのです。

男性によって狩猟されたゴリラの肉は調理され、バカ・ピグミーの胃袋を満たします。しかし、女性の中には「ゴリラは人間に似ている」と言っ、その肉を食べたがらない人もいます。とくに、ゴリラは人間の中でも、バカ・ピグミーとともに森林地帯に暮らしている農耕民にたとえられます。バカ・ピグミーは農耕民に獣肉やハチミツなどの森林産物や労働力を提供し、その代わりに農耕民から農作物や工業製品を得ています。一見、彼らは相互依存的な関係を結んでいるようにみえるのですが、実際、両者の関係は対等とはいいがたく、体格の大きい農耕民を前にバカ・ピグミーはなかなか頭が上がりません。あれこれと命令をする農耕民を見て、バカ・ピグミーがこっそりと「ゴリラが叫んでいるよ」と陰口を言うことは決して少なくありません。そして時には、農耕民の様子をゴリラに見立てたユニークな寸劇が行なわれることもあります。

また、バカ・ピグミーは「農耕民は死んだらゴリラになる」という俗信をもっており、ゴリラに生まれ変わった農耕民がかつての畑に現れたなどということがまことしやかに語られます。ほかにも、バカ・ピグミーの民話の中には、子どもたちが昼間に村に現れたゴリラを人間と勘違いするという話や、ゴリラがバカ・ピグミーの若い娘を気に入り自分の嫁にしようとする話があります (写真 6)。あまりにも人間に類似した体軀やしぐさのた



写真6 民話を語る老女

バカ・ピグミーは、民話を豊かな身振り手振りをまじえて語ります。ときに語り手は歌を歌い始め、聴衆もまた合いの手を入れ語り手に応じます。子どもたちは大きな目を見開いて、森の動物たちの登場する民話に聞き入るのです。

めに、ゴリラは農耕民にたとえられ、人間に間違われ、人間に恋をし、そしてついにはナイフを持つようになったのでしょうか。

ある日、調査村の近くの農耕民がゴリラを仕留め、筆者の家まで持ってきました。農耕民が籠から取り出したゴリラの手を見て、驚きました。人間の手とそっくりなのです。手には均整の取れた5本の指があり、手の平にはしっかりとしわが刻まれており、さらには指紋まであります。ゴリラがこの手にナイフを持っていても、なんらおかしくないような気さえします。森でゴリラがナイフを器用に使って、大好物のジイ (*njiu: Aframomum* spp. ショウガ科) の髓やゴンゴの若芽、ベッドの材料になる葉を採集している様子が目に浮かびました。もしかしたら、スンベム (*sumbem: Ficus exasperata* (Vahl.) クワ科。バカ・ピグミーがサンドペーパーとして使う) のざらざらした葉を使って、ナイフを磨いているかもしれません。農耕民は、ゴリラ

の手に見入っている筆者に向かって、「欲しいか?」と尋ねました。筆者がいらないと告げると、ゴリラの手を籠の中に投げ入れ、スタスタと行ってしまいました。農耕民が去るのを見届けると、バカ・ピグミーは「ゴリラがゴリラを殺した」とお腹をかかえんばかりに大笑いしています。彼らの笑い声はなかなかやみませんでした。

2004年10月、カメルーンに隣接するコンゴ共和国北部スアバレ・ンドキの森で野生ゴリラが道具を使っている様子が初めて観察されました(Thomas Breuer氏をリーダーとする研究チームは、2005年10月 *Public Library of Science Biology* 誌において論文“First Observation of Tool Use in Wild Gorillas”を発表)。一頭のメスゴリラが沼地を渡る際、木の枝を使って、かきわけるようにしながら進んでいたそうです。また、その翌月には、湿地にいた別のメスゴリラが枯れた灌木の幹を湿地に突き刺し、片手でそれを掴んで支えにしながら、残りの手で食用の水草を集めている様子が観察されました。さらにそのゴリラは、湿地を渡るために持っていた幹を倒して橋のようにし、その上を二本足で歩いていったそうです。かつてゴリラとナイフの民話を創作したバカ・ピグミーやこの民話を語り継いできたバカ・ピグミーは、すでにこのようなゴリラの道具使用を森で観察していたのではないのでしょうか。ゴリラとナイフの民話が生み出された背景には、バカ・ピグミーによるゴリラの道具観察があったのかもしれない。では、ゴリラが実際にナイフを使っていた可能性についてはどうでしょ

う。これについてはわかりませんが、もしか
つてナイフを使うゴリラがいたとしたら、親
からナイフを受け継いだゴリラが現代のアフ
リカの森にも暮らしているかもしれません。

ゴリラの狩猟について

近年、伐採による生息地の減少や内戦の影響を
受けて、ゴリラやチンパンジーの生息数が減少し、
保護の必要性が訴えられています。これらの動物
は絶滅危惧種として広く認識されており、アフ
リカの熱帯雨林ではこれらの動物の狩猟が全面的に
禁止されています。しかし、筆者は森の住人（バ

カ・ピグミーや農耕民）によるゴリラの狩猟は、
彼らがこれまでに培ってきた重要な文化のひとつ
であると考えています。また、実際にこれらの動
物はほとんど捕れませんし、ごくまれにこれらの
動物が捕れた場合でさえ、肉は村内で消費され
るだけです。彼らのこのような狩猟はサブシタ
ンスのレベルにとどまっており、外部社会を対
象に商業的な目的で行なわれる狩猟とは異なる
ものであるといえます。現在のところ、森の住
人がこれらの動物を捕り尽くすということは考
えられません。筆者は、森の住人によるゴリ
ラやチンパンジーの狩猟禁止については、住
人の文化と狩猟の持続性という観点から注
意深く検討しなおす必要があると考えてい
ます。